

三好達治 山果集「雨後」について

この詩のつくられた場所・風景と作者三好達治の状況から、私見を申し上げます。

1. 場所と鹿島槍岳を表したことについて。

(1) 場所は志賀高原 発哺温泉 標高1500メートルの高原
宿泊宿は 天狗の湯

この場所からは北アルプスの山並みが妙高・白馬岳から奥穂高まで一望出来る場所です。志賀高原からは約80km離れている。

(2) 昭和8年より信州志賀高原発哺、天狗の湯に滞在、いわゆるく世外(せがし—世俗を脱した状況)感興(かんきょう—興味を感じること)に自適(心のままに楽しむ)し、療養を兼ねた隠者の生活を送っていた。⇒日本の詩歌22三好達治より
不遇の時代、北アルプスの山並みにある「鹿島槍岳」には特別に惹かれていたようである。

◎三好達治は「信州発哺温泉」で次のように書いている。

「発哺というところは、その清涼な気候よりも、その新鮮な岩魚よりも何は措(お)き、その雄大な眺望によって忘れがたい。

……鹿島槍に至る、いわゆる日本アルプスの連峰が一眸(いちぼう)のうちに集まって、清麗な夜明けにくっきりと浮かび出た展望は、到底私などの筆力には写し得ない」

◎ 深田久弥の「日本百名山」47鹿島槍岳に次のように書かれています。

「昼の雲 船のさまして動かざる 鹿島槍てふ 藍の山かな」

これは三好達治君の歌である。この詩人はずっと以前志賀高原の発哺に滞在していたことがあって、その時の作である。

発哺温泉から眺める北アルプスの大観はすばらしい。眼路(めじ—目で見通したところ)の果てに妍(けん—あでやかでうつくしいこと)を競うように高岳雄峰が立ち並んでいる。その見事なパノラマの中で、鹿島槍岳の美しい形が三好君の目を惹いたに違いない。

2. 「雨後」を作詩するころの作者の状況について

(1) 三好達治はこの温泉場を離れられなかったのは、彼の痼疾(持病)の神経性心悸亢進(しんけいせいしんきこうしん—精神的に興奮すると動悸が激くなる病気)の発作のため長く湯治し、萩原朔太郎らから詩人としての方向転換を試みるよう勧められ、追い詰められた状況にあった。

(2) それだけに、特に目を惹く鹿島槍岳と雲の動きから転機を予感出来る光景が見られたとの思いは強く、この詩を読ませたのではないか。発電所に灯がともる方向は「暗」で不遇の状況を表し、鹿島槍岳の方向を「明」とし、転機が近いことを表そうとしたのではないか。

3. 鹿島槍岳と雲の動きについての私見。

(1)どこから雲を見ていたのか。

詩中に「そうしてふりかえれば くものきれめに かしまやり」とあります。また、三好達治は「はつでんしょの灯がともる」と歌っていて、志賀高原にある「大沼－志賀高原最大の湖沼」にある中部電力の水力発電所の方向を見て詩っている。最初は鹿島槍岳には背を向けて、雲の動きと晴れ間を観ているうちに「いつも美しい鹿島槍岳は」と振りかえる形をとっている。しかし、実際は宿泊宿「天狗の湯」の窓辺から、鹿島槍岳が雲の切れ間から見え、自分の心機一転を予想するに十分な光景から、不遇(暗)から転機(明)となる表現として「振り返る」形としたのではないだろうか。

※日本の古典文学の作法では「雲」は別れ・死の象徴とされており、三好達治は療養時代の不遇を「雲」で表し、視界は雲だらけの境遇と思っていたが、この日この時、雲海から雲がひとつつつ切り離されていく、鹿島槍岳も雲の切れ目から眺望できたことが、自分の転機を予感するに十分な景色だったのではないだろうか。三好達治は「閃光」を感じやすい詩人であると言われております。

4. 「雨後」について

三好達治にとっては、鹿島槍の美しさと自分の不遇時代を対照させ、かつ、良好な回復方向への転機を期する詩という一面があったのではと、推察します。

※このように理解すると、愛媛県の西条高校の6人の学生が歌う「雨後」が、一番心を打たれます。
(2008年 声楽アンサンブルコンテスト >